

語状況の現出・恒常化)等を含んで成立している。第四は、(植民地)官僚層とナショナルリスト・リーダーとの関係である。ともに、二重言語状況の中で生み出されながら、一方は「制度」を担い、一方は「対抗制度」を創出しようとする状況が、ここでのポイントである。

こころみにあげたこれらのポイントが、地域と時代によってどのような特性を示すのか、

報告 1 ベトナム

19世紀初頭に西山朝^{タイソン}を倒して成立した阮朝^{グエン}は、明命帝(在位1820-40)期に至って清朝の諸制度を模した中央集権的独裁政治をはば完成させる。この朝廷の権力は「臣民」一人ひとりに直接及んだのではなく社(村落)における豪強層の村落寡頭支配を容認した上で、それを基礎に社を地方行政組織の末端に組み入れることによって全国を掌握していた。

科举制度によって登用され、正従九品の官位にランク付けされた官僚層は、六部制度をとる中央の朝廷および省・府・州・県などの地方行政・司法組織に配置されて、朝廷の権力の執行に当たった。

1858年のダナン攻撃に始まるフランスの侵略は、1862年に南部6省のうち東3省、67年に西3省の領有権を得て「コーチシナ」を領有し、北部・中部に対しては1883、84年の条約で「保護権」を確立、1887年には「仏領インドシナ連邦」を成立させる。

ベトナムを分割支配するフランスは、中部で阮王朝の朝廷以下すべての官僚機構を温存し、利用するほか、北部でも省以下の地方行政・司法組織と官僚制を温存する。また、村落レベルでの有力者の寡頭支配も残され、官

という比較を行なうことによって、東南アジアの20世紀前半の状況を考察するところに、このシンポジウムの趣旨がある。これは、また、東南アジア史における「連続」と「断絶」の問題、ないし、「20世紀の政治的・文化的変容」の問題等、すでに、シンポジウムでとりあげられたテーマとも、関連性をもつものである。

北 川 元

僚・地主層はフランスへの協力とひきかえに大幅な特権を認められる。

儒教の教育を受け、科举に合格して官界入りを果たす官僚に加え、新たにフランス式教育を受けた官僚層も育成され、1919年科举廃止以後は、フランス語とフランス式教育を受けた者のみが官僚になるが、官僚制度そのものは南部を除き旧態依然とした制度が残され、1932年に至って初めてバオダイ帝による手直しを加えられる。

一方、重税と米の輸出を中心とする植民地経営の結果、従来の小規模自作農を主体とする農村経済に大きな変動が生じ、階層分化が進行し、農村人口の約7割が小作・半小作農に転落する一方で、一握りの大地主が出現する。大地主が、その経済力に物を言わせて官職を手に入れ、逆に官僚はその特権を利用して土地を入手することによって、これらの特権階層は一体化してゆく。

こうして、20世紀ベトナムにおける官僚層は、フランスの植民地支配の下で、腐朽性と寄生性を強めてゆく。

阮朝以来存続した官僚制は、1945年の八月革命によってピリオドを打たれる。

報告 2 タイ

タイのエリート官僚, 1892~1945年

市 川 健二郎

1932年革命以前の絶対君主制時代の王族や貴族官僚と以後の立憲君主時代の平民官僚との間で政治新体制下で何が変わり、何が変わらなかったか。また富裕華商は王室用徴税を請負

い旧エリート層の姻戚となり貴族称号を得たが、10年代以後は金融、貿易業へ進出し、やがて高級官僚と結び軍事産業開発の実業家へと脱皮した。彼ら財界人と新エリート層との

姻戚、派閥関係の実態は何か。公私混同の癒着関係、贈収賄の慣行、上司との温情と忠誠の間柄、縁故関係等は伝統的な領主や主人への寄進や仏寺への布施によって得る功德の価値観と相通するものがある。

中央官庁制度が発足した1892年当時は新官庁と王宮や王族私邸との間で公私の区別が不明で、内相ダムロン親王は国王と同様に私邸で公務を決済し、また地稅徴収権を内務省に一括しその2割余を大蔵省へ納めていた。大蔵省が國稅徴収を一本化し同時に紙幣を発行し給与体制を整備したのは20世紀に入ってからである。地方行政では中部タイと他地方との行政の接点として約20州を配置したが、交通通信網の未開発地方では自給自足経済がつづき、地方領邦主中心の伝統的生活圏を国民国家へと統合し領主の従僕を地方行政官僚へと発想転換させるには長年月を要した。

1914年にラーマ6世は『東洋のユダヤ商人』を著わして反華商の民族主義の建前を唱えたが、王室財政の赤字を救った92名の華商に貴族称号を与えるという本音との両面を使いわけた。華商は1908年中華総商会、華商銀行、翌年米商公会を創設して伝統的な秘密結社中心のアヘン等の徴稅請負い業から脱脚し、中華民国の成立、第一次大戦の米、錫、ゴムのブームに便乗して精米、輸出、船舶、保険、金融の諸業種へ多角経営に乗出した。10年代には政官界の銀行預金が普及し、また新エリート層も育った。平民の学校教育が進み、中には王室奨学生や陸海軍や法務省の派遣生となって留学し、欧米の異文明を体験して帰国後に立憲革命の担い手となる者が現われた。

革命指導者の武官、文官と民間人の出自は准王族、貴族官僚、中級官僚、富裕商人など財力のある家庭が多かった。

32年革命集団となった人民党は政党や政策集団ではなく、党内には経済不況や人員整理の嵐の中で政変期待の各派閥間の思惑がからんでいた。その結果、王族や高級官僚を追放して入手した新官僚のイスに固執し、政治革命後の経済社会改革政策に背を向けた新エリートが現われたのは当然の成行きだった。選挙による政党政治は絵に描いたモチにすぎず、人民党系派閥の上意下達政治は軍人政治への途を歩み、38年にはピブン元師の長期安定政権が実現する。一方、地方行政官の人選と任命は中央の人事院が管轄したが、実際には各地方官庁からの推薦者を任命し縁故関係が残存していた。郡役人は怖い「お上の人」という印象がタイ文学作品に描かれているが、民衆は公社や組合金庫から拝借するよりも親類や村人から借金し、また華商の青田買いに依存した。

戦時中の国民信条や外国人就業制限令等の国民精神運動の建前と政官界進出の高給武官や華人系実業家による公営軍事企業の金権癒着の本音とが表裏一体となって並存し、やがて戦後の在郷軍人会と華人系銀行のシンジケートへと展開する。プレミアム大将が率いる現政権が抱えている悩みも軍人政治家と華人系財界人が官僚の金と力を握っている実態と政党政治の理想との力の均衡の問題であり、それは今も昔も変わらないタイ官僚の社会的背景を物語っている。

報告3 インドネシア

ジャワの「新官僚」－20世紀前半のブパティ－

深見純生

1870年代前後の諸改革によって、ジャワの原住民官吏の主な収入源は職田や夫役などの封建的収奪から、政庁から与えられる給料に変わり、またブパティ（県長）を頂点とする原住民官吏の中心的ヒエラルヒーが確定した。即ち植民地原住民官僚制の「容器」が完成した。その「中身」のその後の変化と性格をブ

パティを中心にみていくと次の6点を指摘しうる。

①官吏になるトレーニングはニューウィタ（屋敷奉公、行儀見習）とマガン（無給の見習、待業期間）から学校教育に変わり、ブパティは「ジャワ的支配者」から、大学レベルの学歴が要求される高学歴化した、オランダ